

ター社会がつくられれば、すぐにコンピューターで年齢、職業、職歴等々に見合った人間の名前がはじき出され、企業に派遣されていくという恐ろしい事態が起こりうるわけです。

したがって、私は社会主義にしても資本主義にしても共通している問題というのは、この科学技術の異常な発展の中で個人の自由、個人の人權がいかに守られるかという問題だと思います。幸か不幸か現在はまだ社会主義社会はこのような恐ろしさを体験していません。そこまで生産力の発展が追いついていないにせよ、社会主義が将来当面するであろう問題を、資本主義社会は現実に体験しているという共通の経験の総括が現れてきています。その意味で、まず資本主義社会に住む我々が当面している問題をいかにうまく解決していくのかが、発展途上国型社会主義の将来に大きな影響を与えることも確かな事実です。

社会主義から共産主義へというスローガンの中で、能力に応じて働き欲望に応じて受けとるのが共産主義社会であるという実に陳腐な考え方が依然としてありますが、私は、そういう段階を早く乗り越えて、もっと複雑で豊かな社会のメカニズムを構造的・機能的に分析していくことが、新しい社会主義像、あるいは新しい社会主義理論の展開に必須であると考えます。

非常に簡単ですが、オーウェルの『1984年』と現代をつなげて私の考えたことをお話ししました。

『1984年』とソ連社会

袴田 茂樹

ジョージ・オーウェルの『1984年』に関連して、現在のソ連社会の質的側面について話をしたいと思います。オーウェルの作品は今日読んでも新鮮であるし、すばらしい洞察を含んでいると思いま

す。しかし同時に私は、オーウェルが『1984年』で描いた未来社会は生活のすみずみまでを徹底的に統制され管理しつくされた逆ユートピアですが、このイメージほど今日のソ連の社会の実態から遠いものはないのではないかとと思います。もちろんソ連が管理社会であることは正しいのですが、制度面でなく社会生活の実態を観察してみると全く違った側面が浮かびあがってきます。きょうはそういった面を中心にお話ししたいと思います。

実はオーウェルよりも30年近くも前、ロシア革命のしばらく後にザミャーチンという作家が、グロテスクな超管理社会を描いて、作品『われら』を発表しており、これが『1984年』の下敷になっているとも言われております。個人を抹殺する、合理化し尽された共産主義社会の痛烈な諷刺なのですが、それについてはここではくわしく述べません。

1. 『1984年』はソ連社会の裏返し

我々はオーウェル的な管理社会から全体主義国家というイメージを得ています。また我々はソ連を計画経済の国とみています。これらの観念はソ連社会の質的面とどういふかかわりがあるのでしょうか。

まず我々が計画経済の国という時、人間の理性と合理主義が社会体制に直接反映している国と考えています。少なくとも自由主義体制よりも、人為的な秩序が社会全体により強く反映し貫徹している国と見がちです。社会を自然発生性に委ねるのではなく、理性的に組織することこそが、社会主義革命の目標でした。

また「全体主義」と言われるとき、ソ連社会が軍隊的イメージで理解される場合が少なくありません。つまり国家レベルにせよ企業や組織レベルにせよ、指導者や管理当局の号令一下、右向け右と言われれば皆従順に右を向く社会だというソ連観があります。少なくとも個人が勝手バラバラに生

きている日本のような自由社会と比べる時、ソ連にはもっとしっかりした規律や秩序が社会そのもののの中に存在しているという見方が一般的にあるわけです。しかしこの見方は、ソ連に対する理解を大きく誤らせることになると思います。

確かにソビエトの政治体制は、西側の議会民主主義と比べると一党独裁ではあるし、また党イデオロギーによる支配という側面が強く、ソ連を全体主義国家と規定するのは間違っていないと思います。しかし実際その質的面をみると、ソ連社会は完全管理の社会とはほど遠い、つまり為政者や管理者たちの意図や努力にもかかわらず、全体主義というにはそれはあまりにも無統制、あるいは無規律であって、オーウェルの管理社会の対極にあるのではないかとさえ考えられるのです。

ソビエト社会を計画経済の社会と称することも間違いではないと思います。たとえばモスクワ郊外の整然とした近代的なアパート群を遠くから眺めてみると、自然発生的に雑然と膨張していく日本の都市との違いがはっきり分かります。日本人に欠けているもの、すなわち権力あるいは構想力を貫徹することによって生まれる秩序というものがそこには感じられます。

しかし、目を一旦社会の細部あるいはその機能的側面に向けるならば、これらのイメージはたちまち逆転するのではないかと思います。計画経済といっても、ソビエトではどんな楽天的な企業の責任者も、計画通りあるいは契約通り原料や資材、労働力が確保できるなどと考えている者は一人もいません。是が非でもノルマを達成するためには、コネや賄賂も総動員しなければならないし、必要とあらばどんな非合法的な行為もあえて行わなくてはなりません。どんな企業でも規則を忠実に守っていたら、ノルマの半分も達成できないでしょう。ソ連経済の主要なファクターは、むしろ計画外、規則外の要因といってもいいのではないかと思います。企業の責任者あるいは組織の責任者は、そ

ういった計画外の要因を相手に日夜全エネルギーを費して格闘しているわけです。

ソ連的計画経済は、ロシア的な無政府性、スチヒーヤ（自然発生性）、混沌に整合性と形を与えようという意図を本来もっているのですが、私のみたところ今日ではむしろ逆に、無秩序を助長しているのではないかとさえ思われます。

ソビエトの新聞『リテラトゥールナヤ・ガゼータ』は、「計画というものはしばしば長所から障害に転じ、その結果、国家規律、生産規律、労働規律という規律の全分野で無秩序が生じている」と、ソ連体制の根幹にも抵触するような意見を載せたことがあります。

アンドロポフ政権が成立したあと、その後またチェルネンコ政権が成立してからも、綱紀粛清、規律強化ということがしきりに言われていますが、これもやはりソビエト社会そのものの基盤が秩序性や規律性を欠いていることと深く関連しているのではないのでしょうか。

これはもっと広く社会思想史的に言えば、近代主義あるいはデカルト以来の合理主義がはらむ非合理とも関係しています。啓蒙主義の時代以来、近代人や社会主義者は余りにも楽天的に理性と合理主義を信じ、その結果逆に不合理を生み出して来たのでした。この社会主義の理念がはらむ「合理主義の不合理」とロシアが帝政期以来伝統的に有している官僚主義の体質、無責任システムがアマルガムになって、現在のソ連で問題になっている生産規律、社会規律の乱れといった現象が生じているのです。

オーウェルあるいはザミャーチンの徹底的な管理社会イメージとちょうど裏返しの実例について、具体的な状況をソビエトの新聞、雑誌などから若干紹介したいと思います。

たとえばある工場の工場長は、職場のひどい雰囲気と労働者たちのデタラメな状態について次のように嘆いております。「工場の集会で、遅刻、

ズル休みの常習犯であるガス溶接工に理由をたずねると、彼は顔色一つ変えず『朝サイレンさえ鳴れば寝すごすこともないんだが』などと平然と答える。他人への迷惑を無視した全く無責任なことばである。いつも怠ける無精者、仕事力に酒を飲む者、ズル休みや遅刻の常習犯、こういった連中を相手にしていると、正直いって時に堪忍袋の緒が切れることがある。局長、課長、職場オルグ、同志裁判のメンバーも、みなこれらグウタラ者を相手に苦心している。工場に入って驚くのは、怠け者や酒飲みに対する寛容な態度だ。職場でのなれあいと相互の寛容、怠惰と無責任の連鎖反応、それこそが最も恐いことである。最近人々は、仕事というものは気晴らしではなく義務なのだということを忘れていないのか」。これは別に地下出版の文章ではありません。

別の工場長も、最近新たに現れた頭の痛い問題として労働者の雲隠れ現象を指摘し、およそ次のように述べています。「工場の労働者が不意に何の連絡もなく、一週間も二週間も時には一カ月も二カ月も姿をくらましてしまう。工場側としては彼が一体どこに行き何をやっているのか分からないので、首にすることもできない。普通は何かが起きているのではなくて、ただ仲間とグループを組んでシャバーシカといわれる非合法の請負労働をやっているのだ。一カ月働くだけで給料の数カ月分の収入になることもまれではない。そのかわり朝から夜までみっちり働くわけである。平均賃金は今170～180ルーブルであるが、月にその十倍近い1千数百ルーブルから時には2千ルーブル位の収入になることさえある」。

最近このシャバーシカを認めるかどうか、それをどう評価すべきかが、ソ連の新聞などでも議論されています。

またこの工場長はさらに次のように述べています。「給料が差し引かれることなど気にせず（その位闇労働ですぐカバーできるわけだから）、川

辺で勝手に夏をすごしている者もいる。別の者はまた職場の仕事などはそっちのけで、田舎の畑を耕して出来た作物を売っている。最も規律が厳しいという我が工場でも、ちょっと飲んだので休むという連中は大変多い。公式的にアル中対策に登録されているだけで、従業員の6%もいる。各セクションの課長が毎朝まずやらねばならないことは、その日誰がズル休みをし、誰が遅刻をしたか、また誰が酔っぱらって留置されているか、その数をつかんで人員の配置を行うことである」。これは最近話題になった『E K O』という経済雑誌の記事の一部分です。

農村では事態はもっと劣悪です。たとえばウリヤーノフスク州のあるソフホーズ員は、農業新聞『セリスカヤ・ジーズニ』に次のような投書をしています。「彼は同僚が播種で多忙をきわめている時に、仕事を投げ出し無断でソフホーズから出ていく。そして一年たって全く何くわぬ顔で帰ってくる。しかし腰を落ちつけていたのも誘惑がない間だけで、どこかの建設現場では支払いが多いと聞くと早速また出ていってしまう。このような連中は一生のうちに無責任に何十回も職をかえるが、しかし年金とかさまざまな社会的特典は人並み以上に受け取っている」。

クルスク州のあるコルホーズの例ですが、労働年令のコルホーズ員820人のうち、規定の最低労働日数すらも（男は250日女は230日）働きに出なかった者が、1981年には443人いました。この中にはただ怠けている者もいるでしょうが、相当数は自分のコルホーズでの仕事を放棄して副業の方に精を出しているのです。通常男性はシャバーシカ、つまり半ば非合法の請負仕事のために、長期間コルホーズを離れます。女性は都市の市場に農作物を売りに行きます。最低労働日数をこなさなかった場合、さまざまな処罰が適用されますが、そういったことはほとんど気にかけません。これは『イズベスチヤ』に載った投書です。

スターリン時代には農民は強制的に農村に縛りつけられていました。1932年12月に帝政期の国内パスポート制度が復活され、コルホーズに縛りつけられたわけですが、今日では農民は合法であれ非法であれ比較的簡単に農村をぬけ出ることができるようになりました。70年代にはコルホーズ農民にもパスポートが与えられて、一般市民と同じような自由市民となっています。この自由の結果農民は農村からどんどん出ていき、労働力不足が深刻になっています。

この流出は工業における深刻な労働力不足を、経済の体質改善というよりむしろ伝統的に農村の労働力に頼って補った結果でもあります。最近ソビエトの農村の生活水準は大分よくなっているにもかかわらず、この流出は深刻な問題になっています。ともかく国民は法や規則を無視して勝手に生きているわけです。

2. 国家の法とか規則に対するソ連人の態度

ソ連人は国家の法令とか規則でも、我々が考える以上に簡単に無視します。むしろ我々日本人の方がよほど律義にさまざまな規則を守っています。たとえば交通機関がストライキをやっても、民間企業の場合、社員は這ってでも会社へ行きます。これをソ連人が見たら全くアブノーマルな現象と考えるでしょう。もっとも日本でも公務員の場合は喜んで休みますし、ソ連人に近いかも知れませんが……。

かつてゲルツェンは「ロシア人は、それがいかなる階級の者であれ、罰せられる恐れがなければ必ず法を破る」ということを述べましたが、どうもこの体質や心理は現在のソ連人もその根のところでほとんど変わらずにもっているのではないかと思います。

たとえばソ連では高等教育を受けた人は三年間国家の指示する職場で義務的に働かなければなりません——そのあとは職を変わって自由に別の

職場へ移ってもいい——最近のソ連の新聞によると、この法律もあまり守られていないようです。以下はウラル地方アルタイ地区のある企業の企業長の嘆きです。「わが企業では、モスクワ、リガ、ロストフ、スベルドロフスク、その他の大都市から、1980年に多くの大学卒の専門家を受け入れた。しかし二年余りたって企業に残っているのはわずか三割にもみたない。あれこれ不満を述べ権利を主張し口実をもうけ、さまざまな文書で武装して皆逃げ出していってしまうのである」。

また『コムソモリスカヤ・プラウダ』紙には、「サハリンで働く専門家を見つけるのがどれほどむずかしいか御存知か。何とかサハリンへ行かせても、皆すぐ母が病気になった、父が倒れた、祖母が病気になったということになってしまうんだ。何しろありとあらゆる口実をみつけ出してくる。我々は自由配置の許可証を出すのに忙殺されている始末だ」という、経済管理当局者の言葉が載っています。自由配置というのは、特殊な事情がある人には、国家が決めた場所ではなくその人の希望を優先して職場を与えるというシステムです。

日本でどこかの企業へいったん就職した場合、家族の事情で転勤をことわるということは考えられませんが、非常に固い国とみられているソ連では、けっこうそういう事態が起きているのです。労働流動率も年間2割から3割近くに達しています。2割というと5年間で全従業員が入れかわってしまうほどの激しい流動率です。日本の方がそういう意味でははるかに固定的といえます。ソ連では、すみずみまで管理し尽された固い社会というイメージの中で、逆にその目の粗い官僚システムの間隙で人々は自由な、あるいはデタラメな生活をしているわけです。

たとえば『イズベスチヤ』の社説にこういった記事も載りました。「『例外として』ということばがあるが、そのことばはあまりにもなじみ深いものとなっている。企業に課せられた計画、ノル

マは、『例外として』下方修正されるし、企業長は順番待ちしている者を無視して住宅を“必要な者”に割りあてる。不足している品も裏口から与える。また『例外として』手抜きの不完全な建物でも当局に受理されるし、レストランでは『例外として』規則違反が行われる。また保育園用の建築資材も『例外として』“非常に重要な建築”に回される。あるいは関係のない人物に官庁の証明書が『例外として』発行されたりする」。

こういう例は枚挙にいとまがありません。菊地先生はコネの社会とおっしゃったけれど、ソ連社会はそのたてまえとは全く別の原理で動いているのです。規則をはずれた「例外」の措置がとられるときには、常に客観的なもっともらしい理由があげられ、それが事業にとって不可欠かつ有用なことが強調されます。秩序というものを否定するこのような逸脱は密室の中でこっそり行われております。そして規則は破りながらも、「どうか書類の上では辻つまを合わせてくれ」ということになるのです。プリピスカということばがありますが、書類の上でのごまかし、不正記入、水増し記入のことです。ソ連の新聞は最近しばしばこのプリピスカの横行を批判しています。下から上への報告がデタラメで、その数字なども信用できないといった批判です。これは、ソ連政府自身とその機関紙で、公的な社会主義秩序の世界が実はある意味でフィクションであり、表の世界の裏側に別の実態が存在していることを、間接的に認めているような結果になっています。

3. スチヒーヤと独裁体制

ロシア語にスチヒーヤということばがありますが、それは人為の秩序を破壊するアナキーナ力、あるいは統制のない無秩序な自然力のことです。根源的な自然力、自然環境のせいなのか、あるいは歴史のなせるわざなのか、ロシアでは社会においても人の心においても、このスチヒーヤが圧倒

的な力をもっており、それが生活や文化の基調を決定しているように私には見えます。

逆に我々日本人は病的といっていらいお互いに規制しあい、また強烈に自己抑制して、対人関係に非常な神経を使います。昔から小さな島国は何千万も住んで、逃げ出す余地や自分で自由に生きる余地がなかったせいなのでしょう。その結果世界でも稀な秩序感覚を生み出しました。

それに比べてロシアはスケールも大きく、いざとなれば南方のステップやシベリヤへ逃げて自由の民になる余地があったせいか、自分をぎりぎりのところまでおさえこみ自己抑制してまで秩序を保つというメンタリティは稀薄です。

計画経済というイメージとは反対に、ソ連ではこの非組織的なスチヒーヤ、自然力が、今でも人間の合理的な営みなどあざ笑うかのごとく猛威をふるっています。今日生産規律や社会規律が大きく乱れ、汚職とか腐敗、闇経済が相当ひどくなっていることが西側にも伝えられていますが、これも人々の心や中央集権的官僚体制の内側に巣くっているこのスチヒーヤが、野放図にのさばりできて規律や秩序を蚕食している結果ではないかと思われま

す。ロシアの歴史は、このスチヒーヤを何とかおさえこもうとする、あるいはそれに人為の秩序を刻みこもうとする涙ぐましいばかりの努力の積み重ねでした。アモルフな、つまり無定型な社会に外から形を与えること、組織性と秩序を与えることこそが、時代を問わずロシアの為政者の最大の任務であったということです。

しかしソ連においては、社会面でも生産面でも、そうした当局者や政権の努力にもかかわらず、引き締めには成功していません。あるいは近年、特にブレジネフ時代を通じて、その社会規律の弛緩はますますひどくなっています。だからこそアンドロポフ政権以後、それを締め直す政策をうちだしてきたわけ

スターリン体制はロシアにあってはある意味で悲劇的な必然でした。必然と言っても別にそれを肯定する意味あいではなく、スチヒーヤという状況が強いたところの体制という意味でいっているわけです。ソ連において規律が至上命令となり、時には自己目的にさえなるのも、ソ連国民に規律の感覚が発達しているからというより、むしろ逆にロシア社会自体が自律的秩序というものをおよそ欠いているからではないでしょうか。

これはドイツや日本とは逆です。日本人の場合、法という形で強制される以前のものとして、心理的にある種の秩序指向をもっています。街で警官が誰かを追いかけているのを目撃すると、我々は無意識のうちに警官の方に心理的に自己を同一化してしまい、自分と関係なくても逃げている人間を追いかけたり逃亡を阻止したりします。そういう秩序維持のメンタリティを我々は無意識のうちにもっています。

しかしロシアの場合、雰囲気は違います。警察の方もちょっとした法律違反とか万引きなど本気で追いかけようとしないうし、誰かが追いかけてうまく逃げおおせたなら、周りの人は拍手するくらいの空気さえあります。きわめて人間的世界といってもいいでしょう。

結局ロシア人の反秩序性は、社会の外側や彼の行動様式に見出されるだけでなく、ロシア人の内面にも非常に深く根ざしているのです。たとえばドストエフスキーが西側に初めて出た時も、まずドイツやパリの街並みや人々の行動様式の病的といってもいいほどの整然さに衝撃を受け、こんな無機的な所に人間が住めるかという印象を抱いています。

ソ連では街角のふとしたたたずまいを見ても社会のあり方をみても、形や秩序を与えようとする「人為」の側面よりむしろそれらを壊してしまう「自然」の方が優勢です。ちょっと油断していると、人為はたちまち自然に呑みこまれてしまう感

じを私はもちます。日本の場合、どんな田舎の峠道や山道を見ても、何か人為の方が勝^{***}っていて、人間の自然に対するコントロールがすみずみまでゆきわたっている印象を強くもちますが、ソ連ではむしろ逆のイメージを強く抱かされます。

こういうところから、逆にソ連人の心理には秩序自体を、あるいは秩序を与えてくれるものなら何でも無条件に肯定するという心情も生まれてくるのではないかと考えられます。自ら招いたものであるとは言え、彼らは無秩序状態に翻弄され、それにウンザリしているのです。そこで彼らにとって問題は、とにかく秩序をつくり出すことができるかどうかであって、そのための手段が民主的であるかどうかは二の次というわけです。手段の選択といった「ぜいたく」ははいってられないのです。

ソ連ではどんなに民主主義的人物であろうと、実践の場で規律を保持できない者は全く評価されません。逆にたとえ軍隊的な方法であれ、キチンと規律を保つことのできる者は称賛されます。これは、ややもすればスチヒーヤ、無統制な自然がのさばりてしまうロシアにあっては、ごく自然な心理傾向ではないかと考えられます。

ロシア語にクリトゥールニイ（文化的）ということばがありますが、このことばも精神的価値の問題とは必ずしも関係ありません。もちろんそうした問題と関係して使われることもあります。もっと日常生活の場で頻繁に使われる語です。簡単にいうと、これはマナーとかしつけに関して使われることばで、ソ連人の庶民の生活に今もみられる粗野ともみえるふるまいや風習を免れていることを指します。つまりちゃんとした秩序感覚をもっていることがクリトゥールニイなのです。

ロシア、ソ連の独裁体制は、こういったアナーキーな社会に秩序を与えようとする努力のあらわれと考えられるわけですが、ではここまで規律が乱れる前にもっとキチンと統制をとることができ

なかったのかという問題もあります。

4. 管理者は労働者より弱い立場

しかし、今日では厳罰主義で労働者に秩序を与えようとしてもなかなかうまくいきません。というのは、いま労働力が決定的に不足しているため、労働者に対し少し厳しい態度で臨めばすぐその職場をやめて他へ移ってしまいます。その結果が、先ほど述べたような高い労働流動率なのです。したがって、今やすでに厳罰主義で労働者を締めあげ規律を保つことは不可能な状態になっているのです。むしろ経営者、管理者の方が見方によっては弱い立場にあるような状況さえ現出しています。

ある企業の企業長の、「本来の仕事を労働者にやらせるのに、どうして私たちがこんなにまで彼らに頼みこまなければならないのか。しかも企業責任者のたつての依頼さえも無視して、労働者は勝手にアルバイトに励んだりする」といった嘆きの言葉にそれがよく表れています。

こういった状況は、実は秩序ある固い社会とみえたあのスターリン時代にも、社会の基盤には存在していました。スターリン時代、30年代初期のある社会学的統計をみると、労働流動率が大企業で大体150%でした。つまり100人の企業で1年間におよそ150人がやめていきまた入ってくるといった状況だったわけです。鉱山労働などでは300%、つまり1年間に3回も入れかわってしまう程でした。そのぐらい社会が流動的で無秩序でした。このような状況の中で、社会を固定するために労働手帳とか国内パスポート制といった必ずしも民主的と言えない諸制度がつくられていったわけです。

私自身今のソ連の社会の質の面をみながら、ソ連において民主主義という問題を本来の意味あるものにすることがいかに難しいか、つくづく感じています。以上でレポートは一応終わります。

中国型社会主義

および中国型管理社会の崩壊

加々美 光行

ジョージ・オーウェルの小説は、このディスカッションの話がでて初めて読んだのですが、そこで感じたことは、袴田さんのソ連社会に対するイメージとオーウェルの世界とのズレというのとはちょっと違って、部分的にはかなり中国にも当たっているがあたっていない部分もまたあるということでした。これから話すことは、袴田さんの話とは問題として若干ズレてくるかもしれません。

オーウェルの世界について、袴田さんは全面的に管理された社会だと言われました。けれども僕の読んだ限りで言えば、確かにインテリゲンチアは骨の髄まで管理されております。しかしこのオセアニア国のあらゆる人々が管理されきっているかということそうではありません。一方ではプロレという人々がいて、党や国家の官僚的な世界に対して忠実であることを必ずしも求められない。彼らはむしろ、大切なのは個人的人間関係と思われるような世界で生きているのです。ところがインテリゲンチアに関していえば恐るべき管理が貫徹されています。こういう一種の二重構造をもった世界がオーウェルの世界なのです。

中国に関していうと、中国人のメンタリティは本来インテリゲンチアも一般の農民も含めて、袴田さんが話したロシア的メンタリティと非常に似ております。それは昨今、自然な形態に返りつつある中国社会に出かければ即座に分かります。過去、解放前の中国を知っている方も分かると思いますが、交通秩序はメチャクチャで信号無視が平然と行われる、デタラメな社会であり、基本的にはそういうメンタリティが中国人にもあります。にもかかわらず、中国の社会主義ができあがって